ぼうさいこくたい2025 新潟

（250717時点暫定資料）

「忘れない」の、その先へ

言葉にならなかった<問い>にふれ
<痛み>とともに <関係>を編みなおす
ワークショップ

だからわたしたちは、杭を打つ
「誰が、ここにいたのか」を
「自分は、なにを選ぶのか」を
静かに、でも深く、刻みつけるために

わかりやすいプロジェクト（国会事故調編）

https://naiic.net/

The Simplest NAIIC
わかりやすいプロジェクト
国会事故調編

【概要文】

「被災」という言葉の影に、
言葉にならなかった痛みや問いが沈黙のまま残されています。

このワークショップでは、
震災・病・避難・報道・支援の交差点に立った登壇者たちの語りを起点に、
「語れなかったこと」「言えなかった気持ち」をたどります。

参加者は、問いカードを通して語りと向き合い、
自らの中に響く“語られなかった問い”に耳をすまします。

そして、自らの言葉を「問い」という形で風景に打ち込む静かな行為
——**杭を打つ**——
を通じて、他者との関係、社会との関係を編みなおしていきます。

語りをただ聴くだけでなく、
問いを書く・差し出す・残すという行為を通じて、
「忘れない」のその先にある、
共鳴と連帯の回路をひらく試みです。

ワークショップ芯・目的・象徴的体験（草案）

【核・芯】

震える痛みを杭に、正しさの線の向こうに橋を架ける
「言葉にできなかった痛みに耳をすます場」を作り「その場の空気ごと届く語り」を試みる

経験者の語りから「正しさ」の外側で排除されてきた一人一人の痛みや原体験に、耳をすませる場を構築する。

【目的】

言葉にされなかった痛みに耳をすまし、それが“ここにある”という事実とともに、関係をつなぎ直す

【起こしたい変化 / 参加者に起こしたいこと】

「存在を肯定する」のではなく、“痛みがあるという事実”を受け取る
線の内と外にある人の間で、共に場をつくる
経験を持つ「語れなかったこと」が、誰かの声になる瞬間に立ち会う
人や自然、モノとの関係性を、壊れたままにせず、時間をかけてつなぎ直す

【象徴的体験（イメージ）】

片づけられた瓦礫の向こうで、まだ終わらない問いが震えている。
風景に刻まれた声なき痛みに気づいたとき、自分自身もまたその中にいたことに気づく。
他人事にしていた問いが、自分のものとして立ち上がりはじめる。
誰にも言えなかった痛みとともに、言葉を探し、他者や風景との関係をつなぎなおす手がかりを持ち帰る。